

京都大学	博士（文学）	氏名	大関 綾
論文題目	長編合巻の嗣作に関する研究——柳下亭種員の作品を中心に——		
<p>（論文内容の要旨）</p> <p>はじめに</p> <p>幕末期、庶民に親しまれ、数多く刊行された絵入り小説を合巻という。合巻は長編化の傾向があり、最長編の作品は36年に渡り刊行されたものもある。作品の長編化が可能であった要因の一つは作者の没後などに他の人物が作品を書き継ぐ「嗣作」が行われたことである。長編合巻の嗣作に携わった代表的な作者に柳下亭種員（文化四年-安政五年）が挙げられる。</p> <p>そこで本稿では嗣作が行われた長編合巻の中でも種員が関わった作品を研究対象とした。先行研究において、種員の作品・作風の評価はあまり高くない。しかしながら明治期には著名で人気であった作品が数多くある。種員は合巻の長編化を成功させるために、どのような手腕を発揮したのか、作品本文の記述より分析する。ただし、嗣作作品は作者の交代時期が曖昧である場合も多く、どの編が誰の作であるかを慎重に見極める必要もあるため、本文分析のみならず、作者の検討も行う。</p> <p>第一章 『児雷也豪傑譚』の構成と嗣作</p> <p>第一節 『自来也説話』における「自来也」像</p> <p>読本『自来也説話』は長編合巻『児雷也豪傑譚』の基となった作品であり、主人公の造型にも影響を与えている。ただし、読本の盗賊自来也に対する評価は、先行研究において「悪人」と「義賊」に二分される。この現象は『自来也説話』の前編・後編の序文の間にも見られる。そもそも『自来也説話』は今日伝わる前編五巻のみで当初完結予定であった可能性がある。この点に関して構成や内容面で分析を行った結果、前編の主筋（当初からの筋書き）や後編の執筆にあたり加えられた要素が判明した。そこで、自来也を「義」と「悪」といづれに描写するかを精査し、構想の変化と人物造型の違いとの関わりについて考察を行った。</p> <p>まず『自来也説話』において自来也の義賊的な側面と悪人的な側面がいかにか描かれるかを本文に即して確認した。後編では妖術を用いて金品を奪い、罪のない人まで殺害する「悪人」として自来也を描く側面が強く、特に自来也が妖術を用いる場面では悪人らしさが強調される。一方、前編で妖術が描かれる場面は、おそらく長編化が決定した後に描かれた箇所（元々前編の目次に記されなかった箇所）のみであり、さらに妖術と悪とを結びつける記述はない。したがって自来也は前編では義のある人物、後編では妖術を用いる悪人として描かれたと考えられる。</p>			

自来也は蝦蟇の妖術使いである。自来也に先行する蝦蟇の妖術使いには天草四郎や天竺徳兵衛がおり、『自来也説話』後編の描写に通じるものが天竺徳兵衛ものの歌舞伎や浄瑠璃の詞章に見当たる。『自来也説話』の前編で「義賊」としていた自来也の造型に、後から妖術の趣向を組み込もうとした際、妖術を使う悪人である一方、義の側面も認められる天竺徳兵衛は、モデルとして想起されやすかったであろう。天竺徳兵衛をモデルにしたであろうことは挿絵からも推察でき、義と悪との二面性を持つ天竺徳兵衛を後編から自来也のモデルとした所に作者の長編化の作意が認められる。

ただし、当時の天竺徳兵衛は鶴屋南北の作品の影響で悪人的なイメージが強く、前編の義賊的イメージには直接当てはまらない。前編での自来也像は妖術とは関係のない盗賊としてのイメージであったため、日本三大盗賊のうちの一人で「義賊」とされる日本左衛門の実録と、自来也の描写とを比較検討した。日本左衛門に関しても実録によって描かれ方が異なるものの、双方の人物像が一致する箇所が散見され、前編の自来也像は日本左衛門によると考えて問題がないと思われる。

自来也の描写から前編では義賊の日本左衛門を自来也のモデルとしたこと、そして後編には当時人気の妖術使い天竺徳兵衛を自来也のモデルとしたと分析した。この様に主人公のモデルを変化させたのは、妖術の趣向を取り入れることで、『自来也説話』の更なる人気を狙った可能性がある。自来也が義賊とも悪人とも両様に捉えられるように描かれているのは、まさに当時流行の人物像を巧みに融合させた結果であり、複数の作品の魅力的な点を取り込んだ『自来也説話』は、さらなる発展性を含んでおり、その結果複数の派生作品が生まれる人気作となったと考えられる。

第二節 『児雷也豪傑譚』における嗣作

合巻『児雷也豪傑譚』はその十編まで、読本『自来也説話』前編の主筋を基に、初編に児雷也の幼少期のエピソードを入れ、所々に『自来也説話』後編の趣向を組み込むことで話を構成する。一方、『児雷也豪傑譚』十二編以降、独自の趣向として児雷也に対峙する大蛇丸を登場させたことで本作のさらなる長編化が可能になったことは先行研究で指摘される通りである。

『児雷也豪傑譚』は美図垣笑顔、一筆庵主人、柳下亭種員、柳水亭種清の四人の作者によって書き継がれた作品である。一筆庵が何編から書き継いだかは作中に明記されておらず、さらに天保の改革の出版規制の影響を受けたこともあり、その時期前後に刊行された編の書誌に関する先行研究がある。しかしながら、一筆庵が嗣作を始めた編については曖昧であり統一した見解は未だ見られない。三番目の作者種員は笑顔と一筆庵との執筆箇所の齟齬を序文で指摘しており、その内容を精査すると、従来の見方とは異なり、六編までが笑顔、七編からが一筆庵の作となっていると判断できる。

七編で作者が交代したと見る場合、七編には作者の交代に伴う誤記などが見られ、

同様の誤記は十一編にも見られる。十二編以降には種員が作者である旨明記されているため、一般には十一編までが一筆庵作とされるが、誤記が目立つ十一編にも内容的な齟齬など作者交代の跡が見られないか、十一編に描かれる物語を前後の編との繋がりを含めて検証した。すると、前後とはあまり関わり合いのない話も見られるものの、全体的な傾向としてそれまでの話に決着をつけ、十二編以降で大蛇丸を描出する下地を作ろうとしているように思われる記述がある。これらの要素を考え合わせると、十一編は一筆庵主人の代作者による作であること、それが十二編以降の作者柳下亭種員である可能性がある。

第三節 『青陽石疋礎』二・三編の校閲について

合巻『児雷也豪傑譚』と同じく、柳下亭種員が一筆庵主人の没後に引き継いだ和泉屋市兵衛板の作品に合巻『青陽石疋礎』がある。この『青陽石疋礎』には一筆庵が生前に記した二編上冊、三編上冊の稿本が存する。この稿本を刊本と比較してみると、他に知られる戯作の稿本と刊本との間の異同に比べてより多くの異同があり、かつ誤記などには留まらない異同が散見する。そこで、執筆者の没後に刊行された本の出版過程を知るよすがとするため、異同内容の検討および他資料との比較検討を行った。

まず、『青陽石疋礎』の異同を分析すると、意味の相似する単語の重複を避け、文章の流れを良くするための改訂や、似た意味でも与える印象の異なる語のレベルでの改変が見られる。これは読者の誤解を避けるためや、読者が円滑に読み進められるように校閲を行った結果であると推察される。一方で校訂により齟齬が生じた箇所も一カ所ある。こうした間違いは作者本人がおかすとは考え難いため、『青陽石疋礎』の校閲者は作者本人ではないことを示していると思われる。

次に一筆庵筆の稿本が残る他作品と『青陽石疋礎』との異同内容を比較した。『児雷也豪傑譚』の稿本と刊本との異同には『青陽石疋礎』と同様の傾向が見られたのに対し、それらと同時期に成稿した合巻『今様伊勢物語』の稿本と刊本との異同は少ない。『今様伊勢物語』の校閲は笠亭仙果が行ったことが稿本・刊本共に記されており、傾向の相違から、『青陽石疋礎』の校閲は仙果ではないと思われる。さらには一筆庵自身が校閲を行ったであろう作品、滑稽本『夢輔譚』の異同も『青陽石疋礎』に見られるほどには確認できず、『青陽石疋礎』の校閲は一筆庵以外の別の人物が行ったと考えられる。その人物の候補として嗣作者である種員を挙げることができる。

第二章 柳下亭種員の嗣作 ——『女郎花五色石台』における足利持氏の描写の変化について——

合巻『女郎花五色石台』は曲亭馬琴の生前最後の作品である。馬琴は本作の構想段階で、暴君の役割に史実上実在の第四代鎌倉公方足利持氏を充てる。しかしながら、その趣向は本作を書き継いだ柳下亭種員には引き継がれない。本章では種員が馬琴の

持氏像を受け継がなかった理由を考察する。

まず、馬琴は本作以前にも『南総里見八犬伝』や『開巻驚奇侠客伝』で持氏を登場させる。そこでは主に持氏と室町幕府との対立について語られ、持氏が幕府から「自立／独立」する意志があると記述される。一方『女郎花五色石台』では持氏が幕府の「横領」を企むと記される。「自立」にも君主を殺害し、自身が成り代わるという意味で用いられる用例もあるが、馬琴作品の中でそのように用いられる例が見当たらないため、「自立」と「横領」とは使い分けがなされているのだろう。この単語の使い分けは馬琴の持氏に対する認識の変化が反映されたものと思われる。そこで、馬琴作品中での室町軍記の用いられ方を調査したところ、『鎌倉管領九代記』と『鎌倉大草紙』とが頻繁に用いられることが分かり、持氏と室町幕府の対立より生じた永享の乱の原因に関する記述がその両書で異なることが判明した。その違いが「横領」と「自立」の使用単語の変化をもたらしたと推測される。

『女郎花五色石台』における持氏について、嗣作者の種員は馬琴が主要人物として描いたことを認識しているにも関わらず、自身の担当箇所では描写しない。それは何故かを考える上で、同時期の種員の作品である合巻『児雷也豪傑譚』にも持氏が登場していることが手がかりとなる。『児雷也豪傑譚』では、前作者たちの担当箇所ですら「鎌倉殿」などと表現されていた人物に、種員が持氏の名を充てた。そして新たな物語の下敷きとして上杉禅秀の乱の世界を設定した。板元和泉屋市兵衛が種員に『女郎花五色石台』の嗣作の話を持ちかけたのは丁度その設定が行われた頃だと考えられる。種員は『児雷也豪傑譚』の中で上杉禅秀の乱を描くにあたり『鎌倉大草紙』を参考にしたことを記す。種員が所持したと思われる『鎌倉大草紙』が国文学研究資料館鶴飼文庫に所蔵され、『児雷也豪傑譚』に関する覚え書きが記された紙片も挿まれる。『鎌倉大草紙』での上杉禅秀の乱の発端を確認すると、禅秀の家人である越幡六郎に科があったためとされるが、他の書を確認すると越幡六郎に科がないにもかかわらず持氏が領地を没収したとの記述である。他にも『鎌倉大草紙』では持氏を悪人として描かない傾向がある。その『鎌倉大草紙』を参考にしたため、種員は『児雷也豪傑譚』において正義の鎌倉公方に持氏を充て、禅秀を悪人とする構造にした。すでにそのような構想を練っていた最中に『女郎花五色石台』の嗣作の話を持ちかけられ、困じた種員は『女郎花五色石台』では持氏を描かず、題名にも関わる五勇婦に重点を置いて物語を書き継いだものと考えられる。

第三章 柳下亭種員の長編合巻——『童謡妙々車』の長編構成について——

京都大学文学研究科図書館頼原文庫蔵の合巻『童謡妙々車』二編は早印本であり、その下冊奥目録には開板標目が付される。そこには他では確認できない本作品の角書（孝子は志度六／兎子は魔度六）や作者柳下亭種員が幼少期に歌ったという童謡の歌

詞が記され、童謡に基づいて本作が創案されたことが知れる。さらに、本書は初編刊行（安政二年）の五、六年前には原案が出来ていたともある。その頃は種員にとって前述の『児雷也豪傑譚』を書き継ぎ、彼の代表作とされる『白縫譚』の刊行を開始した時期であった。実際に『白縫譚』三編上冊（嘉永三年）の新板目録には「讐討妙々車」との書名が見え、かつ『白縫譚』十一編（嘉永六年）の早印本に見られる目録にも「敵討妙々車」という書名が見られる。これらの作品の角書は『童謡妙々車』と相違なく、さらに両書ともに式亭三馬の作品を参考にしたとの記述がある。式亭三馬の作品のうち、悪漢小説に分類されるものに合巻『〈関戸矢次郎／牛子魔駄六〉力競稚敵討』や合巻『雷太郎強悪物語』があり、これらの作品と『童謡妙々車』との間にわずかながら関連性が見いだせる。こうしたことから、「讐討妙々車」の構想時点では悪賊魔度六を中心とした敵討ちものになる予定であったと推察される。しかし、弘化、嘉永年間には敵討ちものの出板は下降傾向にあり、出板が見合わされたものと思われる。

『童謡妙々車』刊行時には『児雷也豪傑譚』や『白縫譚』など、種員作の妖術使いが活躍する物語が隆盛を極めていた。その中で『童謡妙々車』でも術者の妙々道人を登場させる。序文などを分析すると角書に名前のある二名と玉苗という傾城を中心人物にしようとする意図がうかがわれ、妙々道人は空飛ぶ鉄の車で自在に移動し、中心人物たちの物語を繋ぐ役割を担う。妙々道人および空飛ぶ車は童謡の歌詞で語義不明の「みやうみやう車」を基に創出したものである。曲亭馬琴はこの「みやうみやう車」と「風」を結びつけ「風車」と考えているが、種員にも同様の理解があり、空飛ぶ車という発想を導いた可能性がある。

この構想が読者にうけたのか、物語が進むにつれ当初の中心人物たちの話は縮小し、妙々道人に対する妖魔道人という二人の術使いが登場してからは主軸が術競べに置かれるようになる。種員の没後には三亭春馬、笠亭仙果がこの作品の跡を継ぐ。明治に入り、山々亭有人は種員が妙々車を飛行する鉄の車と設定した先見性を讃える。この作品の趣向の変遷を概観すると、腹案が出来てから妖魔道人の創出まで、種員が時流に合わせて柔軟に構想の転換を行ったことにより本作の長編化が成功したと言えよう。当時の読者が合巻に求めたものを反映させ、適宜軌道修正を加えながら書き継ぐことができることこそが長編合巻の特色であり、魅力である。そして、これらの長編合巻の変化の要所を精密に把握する作業を積み重ねることにより、幕末期の世態変遷の一隅を顕在化させることができるだろう。

おわりに

本稿のまとめと本研究の独自性、今後の課題について述べた。

(論文審査の結果の要旨)

十九世紀初頭に草双紙の新たな形態として生まれた合巻は、成熟するにつれ長編化の様相を呈し、中には数十年にわたって刊行された作品もある。その間、作者の死亡などにともない別人によって書き継がれること(嗣作)も珍しくなかった。そうした作品は、必然的に全体の統一性を欠き、特に嗣作部分については前作者の設定を踏襲するのみといった評価もなされ、今日、あまり文学的価値の高いものとはされない。しかし、作者が交代してもなお長く刊行が続けられたのは、当時の読者の間で好評を博したからに違いない。嗣作者は、前作者の執筆部分を十分に読み込み、引き継ぐべき要素を取捨選択し、時には新たな趣向を追加しつつ、読者の好みに合わせて展開させてゆく力量の持ち主だったのだろう。こうした合巻作品がいかように書き継がれ、長編化が図られたかを分析することは、当時の読者の嗜好や、ひいては世相を明らかにすることにつながる。本論文は、このような目的意識のもとに、幕末期、多くの嗣作作品に関わった柳下亭種員という戯作者を対象として、その嗣作ないし長編化の方法を解明しようとするものである。

本論文は大きく三つの章から構成される。中でも第三章の『童謡妙々車』に関する論述は、上記の目的が最も達成された例といえよう。『童謡妙々車』は安政二年(一八五五)に刊行がはじまった長編合巻で、初編から八編までを種員が執筆している。明治期にかけて何度か再版され、芥川龍之介も幼少期に親しんだという人気作であった。論者はまず、本作の早印本に見られる奥目録の記述等を手がかりに、本作は当初「讐討妙々車」という題で刊行される予定であったが実現しなかったことを突きとめ、それは敵討ちものがすでに時流に合わなくなっていたからであろうと、同時代の合巻作品の実例に基づいて推論する。さらに、数年後に題を改めて刊行されるに至った要因として、敵討ちの主筋を残しつつも、当時人気のあった妖術の要素を導入したことを指摘し、その際、変更前後の題名に共通する「妙々車」が効果的に利用されたことに注目する。「妙々車」は語義不明の童謡の歌詞だが、種員はそれを玩具の風車と理解していた可能性がある。また、当時、人を乗せて空を飛ぶ車を「風車」と表現することがあった。そうした連想から、当初の構想では善悪両輪の意味で使っていたとおぼしい「妙々車」に、妖術使いが乗って空を飛翔する車という新たな意味付けを行った点を、時好に合わせた種員の工夫と見るのである。このような趣向が好評を得たことは、本作が長編化するに従って妖術使いの果たす役割が大きくなってゆくこと、また、種員の歿後に書き継いだ嗣作者も主筋以上に妖術を重視する姿勢を継承していることから察せられる。本作が長く読者の支持を得ることができたのは、当初の構想から嗣作者の書き継ぎに至るまで、折々に柔軟に軌道修正を施されてきたゆえであることを明らかにし、合巻というジャンルの特性と魅力を存分に伝える好論である。

第一章・第二章は、それぞれ種員が嗣作者として関わった作品を論じる。第一章で扱う『児雷也豪傑譚』は、義賊の側面をもつ盗賊児雷也の活躍を描いて人気を博した

長編合巻である。作者として種員の名が見えるのは十二編からであり、その十二編において種員が新たに持ち込んだ趣向が長編化の成功を導いたことについては、すでに定評がある。論者はそうした先行研究を踏まえつつ、種員が実際にどの時点から本作に関わったかを再検討する。第一章第二節では、従来種員より前の作者の作とされていた十一編の内容を精査し、その中に十二編以降の展開に向けての準備が見いだせることを指摘して、十一編の段階から種員の手が加わっている可能性を論じる。第三節は、直接本作を対象とした論ではないが、他の合巻作品における稿本と刊本との間の本文異同の状況を調査することを通して、本作の十編は作者以外の人物による校閲を経ていること、その校閲者は種員であった蓋然性が高いことを述べている。嗣作の問題を考える上で、誰がどの部分を担当したかの特定は不可欠でありながら、必ずしも容易ではない。その一つの方法を提示した論として貴重である。

第二章では、曲亭馬琴の晩年の作を種員が書き継いだ『女郎花五色石台』を取り上げる。本作における鎌倉公方足利持氏の扱い方が、馬琴と種員とで異なっていることに着目し、それは両者が基づいた資料の違いに起因することを検証している。嗣作者が前作者の方針を意図的に受け継がない事例の分析として有益な論であるが、調査の過程で『鎌倉大草紙』の種員手沢本を発見したこともまた、特筆すべき成果である。『鎌倉大草紙』は種員が『児雷也豪傑譚』執筆の際にも参考にした資料であり、今後の種員研究に資するところは大きいであろう。

以上のように、本論文は、これまで本格的に論じられることのなかった柳下亭種員の嗣作と長編化の手法について、書誌学的調査に基づき出版に至る過程を手堅く検証しながら分析したところに特色があり、独自の成果を上げている。しかしながら、取り上げた作品の中には、長大かつ複雑な長編合巻の全体像をとらえるには至らなかったものもある。特に幕末期合巻の代表作である『児雷也豪傑譚』において種員がいかなる役割を果たしたのか、もう少し踏み込んだ検討がほしかったところである。また、嗣作のあり方から読者の嗜好や世相を読み取るという論者の方法は一定の成功を収めているけれども、時好の反映ばかりが文学作品の本質ではない。今後は受け入れられなかった面も含めて作者と作品の特性をより深く理解すべく、一層の研究の進展を期待したい。

以上、審査したところにより、本論文は博士（文学）の学位論文として価値あるものと認められる。令和3年2月18日、調査委員3名が論文内容とそれに関連した事柄について口頭試問を行った結果、合格と認めた。

なお、本論文は、京都大学学位規程第14条第2項に該当するものと判断し、公表に際しては、当分の間、当該論文の全文に代えてその内容を要約したものとすることを認める。